

ごごみ日和61

特集：オリーブ農園～みんなが元気になれる場所～
～社会福祉法人 オリーブの会～

ごみ減量会員さん訪問記「ごみ減の会員さんってどんな方?」:

祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会
実行委員長 新川耕市さん
副実行委員長 太田航平さん



なごみ日和：KBS京都 アナウンサー 海平 和

コラム：これっているかしら?

切符・磁気カード

活動報告：助成団体決定！

ごみをはかって、まなぶ。はかってわかる！
「ごみ減量推進講座」取組中！！

地域活動レポート：落ち葉の堆肥化を通して、
子どもたちに語りかけたい
～藤森学区地域ごみ減量推進会議～



大地のエネルギーを感じながら
働き、食べ、そして休む
心と身体がほっとできる暮らしを
わたしたちは目指しています

写真 藤田一美

「ごごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、
京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！ <http://kyoto-gomigen.jp/>



手をとりあって ごみを減らそう！

京都市ごみ減量推進会議

🔍 ごみ減

検索

オリーブ農園

～みんなが元気になれる場所～

～社会福祉法人 オリーブの会～

京都市山科区、京阪京津線の四宮駅から徒歩約15分。民家が立ち並ぶ一角に「社会福祉法人 オリーブの会」の活動拠点の1つ、「オリーブ農園」があります。この農園では、心の病と向き合いながら社会生活を送る「オリーブホットハウス」の利用者の皆さんが就労支援を受けています。野菜作りや集団での生活を通して、心と身体の健康を取り戻して欲しい。オリーブ農園のユニークな活動を、施設長の勇川 昌史さんと職員の濱中 祐さんに伺いました。

ようこそ、オリーブ農園へ

「これ、何だか知ってますか？」まず濱中さんに紹介されたのは、緑色の小さな房がびっしりと並んだ植物。「これは、胡麻なんですよ。」と、房の一つを取って、中を割って見せてくれました。本当だ！まだ中の実は小さいですが、黒胡麻がたくさん詰まっています。胡麻の生産は今年で2年目。1年目は、京都でも有名な胡麻油のお店、山田製油さんが行っている胡麻栽培の講習に、濱中さんが参加され、南丹市の“胡麻”という地名の場所で胡麻栽培のノウハウを教わったといいます。胡麻に限らず、オリーブ農園で栽培されている農作物は、農業経験が深い地元の方々に指導をしてもらいながら、利用者の皆さんや職員、ボランティアスタッフが丸となって育てています。

農園の向かいには、地元で「山の神」として知られる、藁で作った大蛇が祀られており、五穀豊穡と土地の安全祈願がなされています。大蛇の厳かな佇まいからは、古くから里山の恵みに感謝し、里山を守り暮らし続けてきた人々の畏敬の念が伝わってきました。



小さな房の一つ一つに、胡麻の実が詰まっています

地元との二人三脚



施設長の勇川さん

オリーブ農園は、今年で9年目を迎えます。オリーブの会の理事が中心となり、地元の方々との共同生産のスタイルが実現しました。地元にある農機具や地域の方の力を結集した結果、地域に根ざ

した農業を展開しています。みんなが‘おばあちゃん’と呼ぶ、元専業農家の女性を筆頭に、土地の耕し方、種の蒔き方や蒔く時期など、一つ一つ教わりながら挑戦してきました。「農園の仕事を通して、初めて雨の有難さがかかるようになりました。でも、時には大雨で野菜が病



濱中さんが落ち葉堆肥の出来具合を見せてくれました

気になったり、作付けができず途方に暮れることもあります。自然が自分たちの思うようにはならないもどかしさも含めて、ありのままを受け入れられるようになりましたね。」勇川さんは、とつとつと語ります。少量多品目の生産を目指し、今では同時期に20品目を超える農作物を収穫できるまでになりました。地元のスーパーや飲食店から

の評判も上々です。平成25年度には、当会議が行う「市民等からの提案によるごみ減量モデル事業」にも採択され、農園内に7基の堆肥袋を設置。出来上がった落ち葉堆肥を「山科茄子」をはじめとする地元産の伝統野菜作りに活かしており、注目が集まっています。

作る喜びが、生きるエネルギーに

夏の農園の朝は早く、ボランティアの方々を中心に、早朝5時過ぎから野菜の収穫作業は始まります。お昼頃には一段落が付き、その後は、野菜の選別や袋詰めなど、細かな作業が続きます。オリーブホットハウスの利用者は、その日の体調に合わせて職員と一緒に作業を進めます。オリーブ農園では収穫物の加工も行っており、大根は切干大根に、さつまいもは干し芋にと、昔から日本人が親しんできた味を丁寧に伝えていきます。利用者やボランティアの方からは「こんな風に食べると美味しいよ」というアイデアが出されることもあり、瑞々しい大葉はしそジュースに変身。このしそジュースは、地下鉄東野駅近くの「こころのふれあい交流サロン・るまんやましな」でも旬のメニュー

として登場し、程良い酸味としその香りが疲れた身体を癒してくれます。

これからのシーズンは、さつまいもが収穫の時期を迎えます。オリーブ農園では、近くの病院の院内保育の子どもたちが秋の芋掘りに来たり、野菜の卸先でもある関西よつ葉連絡会さんの会員さんとの交流会など、楽しいイベントが待っています。



伝統野菜「山科茄子」は10月中旬まで栽培されます

心と身体のバランスを大切に

最後に、オリーブ農園が目指すところを勇川さんが語ってくれました。「僕らは、野菜の収穫量を増やそうとか、収入を増やそうとか、そんなことにこだわってはいません。もちろん、収入も大事ですが、それよりも利用者さんやここで一緒に頑張っている皆さんが充実した毎日を送れること、心と身体のバランスが保てる環境作りを最優先に考えています。」オリーブホットハウスの利用者は、社会の無

理解の中で本来持っている力を認められず苦しんでいる仲間たちです。この農園で土地を耕し、収穫を経験することで笑顔や積極性が戻ってきた利用者も多くいます。「畑にしていると、大地のエネルギーをもらっているなあと感じます。僕らも癒されていますね。」濱中さんも力強く呼応します。福祉の心と人を勇気付ける行動力を持ったお二人は、地元の宝です。「平和」の象徴であるオリーブ。この場所から、心豊かな人々の輪が広がっています。

社会福祉法人 オリーブの会 URL <http://olive-net.info/>

- オリーブホットハウス ▶ 〒607-8142 京都市山科区東野中井ノ上町3-33
 - オリーブ農園 ▶ 〒607-8115 京都市山科区小山北林町8
 - るまんやましな（こころのふれあい交流サロン） ▶ 〒607-8154 京都市山科区東野門口町1-2
- 営業日時 ▶ 毎週、月、水、木、金曜日の午前10時～午後4時まで



市民主導でやり遂げた 「祇園祭のごみゼロ大作戦」 21万食分のリユース



リユース食器導入の新聞広告

真夏の京都を彩る祇園祭。巡行前の宵山・宵宵山は山鉾見物客で大にぎわい。露店や屋台が並び、通りは人波であふれる。一方で排出されるごみは大問題となっていた。これに憤然と立ち向かい、官を巻き込み市民主導で減量を成し遂げた、ある事業に迫った。

祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会

実行委員長 新川耕市さん (京都環境事業協同組合 理事長)

副実行委員長 太田航平さん (NPO 地域環境デザイン研究所 ecotone 代表理事)



露店でも使いやすい形のリユース食器

ごみをなんとかしよう！熱意が結集

祇園祭のごみを問題視する動きは、これまでもあった。市民団体などが、ボランティアを募り、ボックスを設置するなどして分別回収を行っていた。2011年(平成23年)からは調査も実施。京都大学環境科学センターの浅利美鈴助教授らの実態調査によると、2013年(平成25年)は露店が並ぶ3日間、見物客71万人に対し、57トン(重量ベース)が排出された。道路に散乱するごみも少なくなかった。

なんとかしなくては…、リユース食器が導入されれば…、世界に誇る祭になる…。そんな意思を持つ人々が結集したのは、今年3月のことだった。

主として事業系ごみ収集を行う事業者の団体「京都環境事業協同組合」、リユース食器を用いたイベントでごみ減量活動に取り組んでいる「NPO法人地域環境デザイン研究所 ecotone」のほか、「美しい祇園祭をつくる会」など、環境市民団体、事業者団体等が結集。また、排出事業者としての課題解決に向け、新たに主体性を見せ加わったのが、屋台を取り仕切る「五条露店商組合」だ。こうして「祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会」が立ち上がった。呼びかけ人として門川京都市長も賛同し、官民協働の体制で、活動をスタートさせた。

予想を超えるボランティア応募 説明会も開き、情報を共有

実戦に向け、支えとなるのは、人の力であり、金の力。6月、ボランティア1,500人の募集を呼びかける。環境活動経験の有無を問わず募集したところ、予想を超え1,600名が応募。大学、企業、NPO、行政のほか、一般市民の個人参加など、組織や年齢を超えての反響だった。中には車椅子での参加もあった。用意したTシャツが不足する事態に。平日の午後、土日に説明会を24回実施し、事業目的の理解を促し、リユース食器システムや作業内容を徹底した。初めての取組となる、露店商への説明会も行い、システムの理解を促した。

もう一つの力である活動資金。「1,000人の1万円で祇園祭をごみゼロに！」というスローガンを掲げ、1,000万円を目標に募り、個人など総計1,064万円が集まり、活動資金に加えた。その他、助成金、



車体に付けた「バナー」を見せていただきました
新川実行委員長(右)と
京都環境事業協同組合事務局長 近藤氏

協賛金を得たが総事業費約3,000万円には届かず、資金面での課題が残った。

広報活動も手を尽くし、新聞、テレビなどで採り上げられ、京都三条ラジオカフェには、門川市長も登場。新川実行委員長らと出演し、事業を紹介した。さらに町中を走る「京都環境事

拠点32カ所を設営 深夜までの回収作業

7月15日午前10時、実行委員メンバーやスタッフ20名が集まり、開会式を行い気炎を上げた。12時、集まったボランティアたちと共に作業開始。回収拠点の設営、露店商が使うリユース食器の手配など、役割を分担して体制を整えた。エコステーション(回収拠点)は、烏丸通(高辻~御池)20カ所、四条通5カ所のほか、西洞院通など合計32カ所。通行規制が午後6時~11時の四条通と烏丸通は夕方からの設営となった。

リユース食器は、飲料容器大小2種、角皿大小2種。リユースマークが入ったポリプロピレン(PP)製だ。耐熱温度120℃、耐冷温度-30℃で、洗えば200回以上くり返し使える。環境負荷の低減効果も、使い回せば紙コップよりはるかに高い。この食器が33万食分用意された。配布した露店商は、

ボランティア2,000名をはじめ多くの協働が成功に導いた

歩行者天国となった2日間でリユースされた食器は21万食分。約8割が返却され次の出番を待つ。協力したボランティアは延べ2,000人、露店商も約200店舗が参画した。

使われたリユース食器は、中間回収ポイントとなった「京都産業会館」に集められ、その後、福祉施設なども借りて洗浄された。ボランティアによるごみ拾いも行われ、見物客の意識へも影響を及ぼしたのか、「散乱ごみが少なく、通りがきれいだった」と、地域の方からも評価された。

新川実行委員長は「ボランティアの熱意に支えられ、やり遂げられた」と全体を振り返る。さらに、露店商の協力を評価しつつ、今後は積極的な広報活動や、露店商以外の店舗の参加が必須と課題を挙げた。



エコステーションでの回収の様子
(撮影 井上和彦氏)

業協同組合」会員各社が所有するごみ収集車約200台にバナー(横断幕)を取りつけ、動くPR活動を行ったり、Facebookやツイッターなど、ネットでリアルタイムにPRを展開した。

「祇園祭のごみをゼロにして、世界に誇る祭に」との思いが結実するときが、いよいよやってきた。

約200店舗。食器を使わない飲食以外の店を省くと、約8割の店舗への導入にあたる。

設営が終わり夕間に包まれるころ、人出が増し、屋台で使われたリユース食器がエコステーションに持ち込まれ、動きが活発になってきた。15日は深夜まで活動が続く。

翌日、16日も同じく12時にボランティアが集合し、実行委員の指示でそれぞれの持場で役割を担った。



屋台の様子

イベントでのリユース食器活用を通して環境活動を重ねる太田副実行委員長は、市民の環境活動の広がり期待を寄せる。「リユースの行動が日常の中で広がり、2Rがあたり前の社会に」と話す。

「祇園祭ごみゼロ大作戦」の実践で環境への負荷はどれくらい低減されたのだろう。数値的評価もさることながら、大切なのは、市民主体で事業が発案され、多くの人々の共感と協力を得て、事業が営まれたことなのだ。参加した人々はもちろん、この夏の「祇園祭ごみゼロ大作戦」は、環境活動においてレジェンドになりうる「今後の道を切り開く『大作戦』」であった。来年の『大作戦』に期待したい。



太田副実行委員長

祇園祭ごみゼロ 大作戦実行委員会

毎年大量の廃棄物が排出され大きな問題となっている祇園祭(宵山行事)に「リデュース」「リユース」のいわゆる2Rの視点を導入し、環境に配慮したごみゼロ祭へと導く取組を進めるために立ち上がった組織。
(構成団体)
・美しい祇園祭をつくる会・きょうとNPOセンター・京都環境事業協同組合・京都市・京都府地球温暖化防止活動推進センター・五条露店商組合・地域環境デザイン研究所 ecotone・京のアジェンダ21フォーラム

森田知都子(平成26年8月19日、20日取材)

会員さん募集！ あなたもごみ減の会員になりませんか？

京都市ごみ減量推進会議は、つながりや創意から生まれる様々な活動を展開することにより、ごみを減らし、環境を大切にしたいまちと暮らしの実現を目指しています。市民、事業者、行政で取り組めば、きっとできる！当会議では、ともに活動する会員を募っています。詳細は、事務局へ TEL:075-647-3444

自然は本当に面白い ～スローガンは「センス オブ ワンダー」～

叡山電鉄の京都精華大前駅を降りると、そこは京都市内とは思えないほど自然にあふれた空間、気温も市内より少し涼しく感じます。今回はフィールドワークを中心としたユニークな環境教育を展開されている、京都精華大学人文学部教授板倉豊先生に、先生が目指す環境教育についてお話を伺いました。

環境教育にはリアルな体験が大切

研究室に入ると、壁一面に専門書が並び一方、机の上には昆虫の標本やハチミツの入ったビンなど、冒険好きの子どもの部屋を連想させるようなものがたくさん並んでいました。ハチミツについて尋ねると「最近、養蜂にも関心があるんですよ!」と声を弾ませてお話しされる先生。大学近くの農家と連携して、授業ではリアルな自然体験を提供しているそうです。その他、深泥池や鞍馬山における外来種の調査など幅広く活動されています。先生のご担当科目「自然教育論」「地域環境論」などは、すべて2コマ連続科目(大学の授業は通常1コマ90分なので180分の科目)に設定し、このようなリアルな体験ができるフィールドワークに十分な時間を確保しています。

一生のスローガンは「センス オブ ワンダー」

「環境教育で最も大切だと思うことは?」と尋ねると、「レイチェル・カーソンの有名な著作名でもある『センス オブ ワンダー』です!」と力を込められました。センス オブ ワンダーとは不思議さに驚嘆する感性のこと。先生ご自身も、自然観察指導員、森林インストラクター、ネイチャーゲーム指導員の資格をもち、これまで30年間、京都自然教室(月に一度の自然観察会)を開催され、自然の楽しさや面白さを学生や子どもたちに広く伝えておられます。このような子ども向けのイベントには先生のゼミ生も参加・協力し、最近では、京都市立伏見工業高校工業デザイン科の生徒と京都



学生作のねこバスでパン焼き体験



京都自然教室で竹の炭焼き体験

精華大の学生のコラボイベントで七瀬川の調査も行っているそうです。

英国ウエールズCATでの研修と研究

2012年4月～9月、英国ウエールズにあるCAT(The Centre for Alternative Technology / 自然エネルギー研究所)において自然エネルギーおよび環境教育の研修、研究に従事されていた経験をお話してくださいました。CATは、自然・技術・人間の調和を目指して活動している公益団体に、環境教育を専門とする教員への研修も行っています。ここで板倉先生は、森のクラフトやウエールズ式炭焼き、ストローベールの家建築、ハーブ等の講座の研修を受け、これをもとに日本の環境教育との考え方や体験法の違いについて研究されているようです。「ここで兄弟の契りを交わすほどの友人ができた!」と講師の先生とのツーショットの写真を見てくださいました。炭で黒く染まった鼻でにっこり笑う先生のお顔に、先生がスローガンにかかげておられる「センス オブ ワンダー」の意味がにじみ出ていたように感じました。



英国ウエールズCATにてバイオマス研修

板倉 豊 先生

京都精華大学人文学部教授。
京都自然教室事務局長、きょうとグリーンファンド理事長。京都市公害対策室に24年間勤務。その間3年間JICA専門家としてアフリカに赴任。自然観察指導員、森林インストラクター等資格を持ち、30年間京都自然教室事務局を務めている。著書に「共感する環境学」、「環境教育への招待」等多数。

グリーンキーパー顧問 高野 拓樹 (平成26年8月5日取材)
*グリーンキーパーは、
京都光華女子大学の環境ボランティアサークルです。
http://www.koka.ac.jp/crc/gk_hp/gk_index.html

これって、いるか? 第6回 切符・磁気カード

このコーナーでは、暮らしの中にある「なんとなく使っているけど、本当にいるのかなあ?」というものに注目して「これをやめれば、ごみも減るよね」というものを紹介していきます。

バスや電車に乗るときにICカードを使うことが多くなりましたが、まだまだ使われているのが切符や磁気カード。特に京都市内は市バスでICカードがまだ使えないこともあり、私も磁気カードを使っていますが、いよいよ今年のクリスマスイブにICカードが使えるようになるそうです。これを機会にみんなでICカードを使えば、切符や磁気カードのごみも減りますね(ちなみに切符は紙、磁気カードはプラなので駅の回収箱に入れれば、リサイクルされますよ)。



▲なるべく使わないように・・・

(事務局 齋藤友宣)

なごみ 日和



KBS 京都 アナウンサー
うみひら なごみ
海平 和

●● 第3回 五山の送り火 ●●

近年全国で被害が多くなっている集中豪雨。この夏も広島をはじめ多くの地域が被害に見舞われ、京都も例外ではありませんでした。いつ起こるか分からない自然災害、それはかなり身近なものであることも改めて強く意識させられました。

もうすっかり秋の風情となりましたが、京都では8月16日の五山の送り火が終わると「あー今年も夏が終わったなあ」と感じるものですね。京都で生まれ育った私は子どもの頃から送り火を見つめてきましたし、KBS入社後は中継に携わってきました。今年も広沢池から灯籠流しの様子と共に鳥居形の点火の様子をレポートしました。

ただ…今年は当日の昼すぎから大変な大雨に見舞われ、鴨川は増水し、市内の道路も冠水するほどの集中豪雨。五山の送り火はお精霊様を送る行事ですので滅多なことがない限り順延にはなりません。ですがこの大雨、不安を抱え広沢池に向かいました。

池のほとりでは雨の中1500以上の灯籠の準備中。炎が灯さ

れ船で池に運ばれる五色の灯籠。「お願い、雨やんで」みんなが願っていました。この日は浴衣でのレポート、下駄の白い鼻緒が泥で真っ黒になるほどの天候、であったはずなのに少しずつ雨脚は弱まり…送り火の始まる少し前に雨はあがったのでした。みなさんの思いが通じたんだ!感動しました。1000年を超える歴史ある美しい広沢池に浮かぶたくさんの思いをのせた灯籠が、風にゆらゆらゆられていきます。そして浮かび上がる鳥居形の炎。周りの方は自然に手を合わせ穏やかな表情でみつめていました。遍照寺の生石住職は、「自分自身と御先祖様のつながりを感じてほしい。みなさんがここで御先祖様を大切に思う気持ちは伝わってくるから、この行事をしっかりと守っていきなさい」と話されました。

今ある五山の送り火も過去には十山あったとか。やはり1つのもを守り伝えていくのは大変なことです。多くの思い、協力が必要です。そうやって美しい池が守られ、山が守られ、京都には様々な伝統、行事が受け継がれています。これからもずっとその大切さを考えみんなで守っていききたいものです。



雨の中での中継準備

海平 和:京都市出身、2010年KBS京都入社。テレビ「京スポ」、ラジオ「森谷威夫のお世話になります」などに出演中。

ごみ減 活動報告

ごみ減量モデル事業 採択団体決定!

平成26年度市民等からの提案によるごみ減量モデル事業の助成団体が、以下の7団体に決定しました。参加・応援よろしくお願ひします!(詳細は、京都市ごみ減量推進会議 ウェブサイトをご覧ください)

- ◆「祇園祭ごみゼロ大作戦」祇園祭ごみゼロ大作戦実行委員会(実行委員長 新川 耕市)
- ◆「市街地における雑がみ回収モデル構築」特定非営利活動法人 木野環境(代表理事 丸谷 一耕)
- ◆「~地球にやさしいエコな子育て~ 0歳からのおまるでゴミを減らそう!」おむつなし育児研究所 京都サロ(代表 西山 由紀)
- ◆「北区エコまつり」北区地域ごみ減量推進会議(代表 山本 玉幸)
- ◆「落葉の堆肥化を介した竹材資源のエコライフへの提案ー目指せゴミコロリー」NPO法人こどもアート(副理事長 水野 哲雄)
- ◆「Remake Repairで2Rを!~手放すよこび、作るたのしみ。それはお金では買えないもの~」
室町地域ごみ減量推進会議(会長 織田 英夫)
- ◆「Ecoおばちゃん Project 2014」Ladies' Eco Circle「プラムロード」(代表 西井 博子)

落ち葉の堆肥化を通して、子どもたちに語りかけたい

藤ノ森小学校の中庭からは、朝から賑やかな声が聞こえてきます。スコップや小さな鍬を手に作業をしているのは、藤森学区地域ごみ減量推進会議（以下、藤森ごみ減）の皆さん。月に1度、落ち葉の堆肥作りのために汗を流しています。藤森学区では、平成22年に地域ごみ減を立ち上げる前から、落ち葉の堆肥化に取り組んできました。少しでも子どもたちに土と触れ合う機会を持ってもらいたい。小学校との繋がりが深い藤森ごみ減だからこそできる、細やかな活動をレポートします。

メンバーの得意分野を活かして

現在、京都市内の小・中学校では、「落ち葉の堆肥化」の輪が広がっています。しかし、一口に落ち葉を堆肥化すると言っても、実際には



作業をスムーズに進めるため、新たに堆肥ボックスを増設

多くの手間と時間がかかります。また、力仕事も多く、この活動の意義を理解し、共感してくれるメンバーが集まらないと継続はできません。幸い、藤森ごみ減では母体となった女性会のメンバーをはじめ、当時藤ノ森小学校の用務員であった神保さんや、少年補導委員会、育友会（PTA）の仲間からも賛同を得られ、お互いに出来ることを分担しながら活動を続けています。この日は、より使い勝手の良い堆肥ボックスにするため、増設作業も行われました。板材を慣れた手付きで組み上げる神保さんは、まるでスーパーマン。女性陣も堆肥の入れ替えに奮闘します。暑い中での重労働でしたが、目標を達成した皆さんのお顔はとても爽やかでした。

小学校からの希望も受け入れて

毎年秋になると、小学校内ではたくさんの落ち葉が出ます。小学生によって集められた落ち葉や枯れ草は堆肥ボックスに入れられ、じっくりと時間を掛けて有機肥料に生まれ変わります。出来上がった堆肥を使って、今年の6月末には小学5・6年生の園芸委員が「ふれあい広場」の花の苗を植えました。堆肥ボックスの落ち葉は、どうやって堆

肥になるのだろうか？藤森ごみ減では、子どもたちに分かりやすいようにパネルにまとめ、身近な自然の循環に興味を持つきっかけを作っています。地域と小学校の連携によって咲いた「ふれあい広場」の花々は、訪れた人を温かく迎えています。



堆肥化の作業に参加した皆さん
前列左から 光安さん、屋敷さん、田仲さん
後列 神保さん、濱名会長

楽しみがあるから続けられる

小学校での環境教育は今や当たり前となっていますが、「土いじりをして、虫が嫌い、虫が怖い、という小学生は多いからねえ。」と濱名会長は苦笑い。「私たちの世代は、落ち葉や雑草を堆肥にすることが当たり前やからね。」その智慧が、いま小学校で生きています。地域の大人たちが一生涯懸命に、楽しく汗を流している姿を見て、子どもたちにも感じる所があるはず。その期待は、藤森ごみ減の活動のエネルギーにもなっています。



落ち葉の堆肥だけで生き生きと育つ花々

濱名会長は、京エコロジーセンターが開館した2002年から3年間、エコメイトとしても活躍され、現在では宇治田原の白川植田で、ビオトープを守り育てる活動もしています。子どもたちと一緒に

に育てた野菜を、みんなで料理をしてわいわい食べる。山も川も畑も、恵みを頂く代わりにきちんと手入れをする。そんな暮らし方を子どもたちと共有できることが本当に嬉しいと仰います。

環境を「学習」するだけでなく、その学びを暮らしに活かして欲しい、藤森ごみ減の皆さんの背中からは、そんな願いが聴こえてきました。

松村香代子（平成26年8月21日取材）